
そして、ボクは殺される

トマト男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、ボクは殺される

【コード】

N6983C

【作者名】

トマト男爵

【あらすじ】

猟奇的殺人鬼、カガミタカヒト。死刑となり、肉体を失った彼に贈られる『宴』とは…

『葬式』

「42731番、時間です。出なさい。」

薄暗い部屋の中に居る若い男に無機質な声がかけられた。その部屋の住人、カガミタカヒトは、ゆっくりと立ち上がり扉へと向かって歩く。

「お世話になりました」

迎えに来た看守に頭を下げ部屋を出る。あと一時間もしない内に自分分は死ぬ。その事実が、タカヒトを高揚させていた。

連続猟奇殺人鬼タカヒト。八人を惨殺した男。彼は、“美”の表現として人を殺してきた。そんな彼の究極の“美”は、『自殺ではない自分の殺害』。

今、遂にそれが叶う。高ぶるな、という方が無理な話だった。狭い廊下を抜け、地下へと降りて行く。やがて、奇妙な部屋に入った。正面には祭壇があり、蠟燭の焰が揺らめいている。漂う線香の煙の中で、タカヒトは気付いた。

そっか、ボクのお葬式なんだ。“故人”は此処に居るのにね…

タカヒトは気付かれないようにクスリと笑う。

「それでは、お焼香を」

看守の声に、タカヒトは三回焼香した。

殺した『作品』に。

“死刑”の『先輩』に。

そして、自分に。

「何でも好きな物を食べていいですよ。」

看守が祭壇に盛られたお菓子を指し示した。

「“虫歯”になっちゃうからいいです。」

看守は怪訝な顔をしながら、そっとタカヒトに小さな錠剤を手渡した。

「穏やかに“逝く”為の薬です。飲みますか？」

タカヒトは薬を返し、笑顔で答えた。

「大丈夫です。」

そして、タカヒトは祭壇の裏の扉を開けた。

さあ、いよいよだ。タカヒトはひとり、階段を昇りはじめた。

人生最期の道をタカヒトはゆつくりと進んだ。陶酔した瞳で前を見つめ、口元には微笑みすら浮かべて…

「遂に、“夢”が叶う瞬間ときがきた…」

そう呟くタカヒトに、執行官の一人が目隠しの布を巻き付けた。

「規則ですから…」

タカヒトはその言葉に小さく頷いて応え、一步前に進んだ。そして、タカヒトの首にロープの環が架けられた。

「42731番、いえ、カガミタカヒトさん。何か最期に云いたい事がありますか？家族とか、恋人等に…」

タカヒトは一言だけ呟いた…自分に向けて。

「最高だね、この気分」

執行官は無言でその場を離れた。

「…死刑、執行」

誰かの合図と共に、タカヒトの足元の床が消えた。首に架かる身体
の重み、締め上げられ、急速に失われる酸素…それらも今のタカヒトには、苦痛ではない。

『ああ…これだよ…ボクはこの瞬間の為に生まれてきたんだ…』

目隠しの中の闇に、唐突に真つ赤な闇が広がっていく。何もかも包み込んでいく赤い色の奔流。赤く、赤く…

『きた…“きた”よ…』

歪みきつた自己陶酔の中でカガミタカヒトは絶命していった…

「絞首、止め。医師の確認を…降ろせ。」

事務的な合図で、タカヒトであった肉のヒトガタは、医師の死亡確認によって、その死亡が確認された。

そんな光景を、タカヒトは上から見下ろしていた。

「あゝあ、死んじゃったよ、ボク…」

さて、これからどうなるのかな…？タカヒトは“お迎え”が来るのを待った。

しかし、タカヒトが期待したような『お迎え』は来ない。段々と退屈になり、不機嫌になるタカヒト。

「何だかなあ…これってカミサマの放置プレイ状態って感じ？」

ここに居ても埒が開かないとばかりに、タカヒトは安置部屋を離れようとした。その瞬間。タカヒトの意識は急速に薄れ、視界は赤く染められていく…

『撲殺』が始まる『宴』

赤い闇の中に、タカヒトはいる。あの素晴らしい死刑ひととぎの余韻に酔いしれながら、次に自分に訪れる『コト』に期待していた。

「さあ、何が始まるんだろう…?」

不意に、タカヒトは手足の自由が利かなくなったのに気がついた。まるで、縛られているような…

「何だろう?ステキなコトが始まるのかな?」

唐突に、右足に衝撃が奔る。何か鈍器のような物で殴られたようだ。甲の部分に痛みを伴う熱さが残る。

「ああ、ボクはまた殺してもらえるのかな?」

タカヒトの瞳に倒錯した愉悦が広がる。

辺りは真つ赤な闇。いつの間に現れたのか、タカヒトの前には黒い人影がいる。恐らく、手にしているハンマーのような物がさっきの痛みの原因だろう。

「いいよ…もう最高だよ…次は腕?それとも顔?」

タカヒトは殺される悦びに期待している。究極の美の追求、『自殺では無い自分の殺害』が死んだ後まで味わえる。これ以上の悦びは考えられない。

『バランスって、大事だよな?やっぱり次は…』

何処かで聞いた声。タカヒトは、その声の主を知っていた。

「そんな…まさか…」

紛れもなく、その声はタカヒト本人のものだった。

「これじゃダメだよ、ボクを殺すのは他の誰かでなきゃ…」

タカヒトの言葉は途中で遮られた。人影がタカヒトの左足を砕いている。

尚も、タカヒトは自分の影に殴られ続ける。手、脚、肩、そして肋骨…

「やめる…ボクはボクを殺してはダメなんだよ…」

自分が自分を殺してしまっただけの『自殺』になっただけ。それだけは許せない。自らの美意識にかけても、『自殺』だけは。だが、そんなタカヒトの美意識などお構い無しに、影はタカヒトを破壊し続ける…もはや、タカヒトの首から下は全ての骨という骨が粉碎され、いくつかの臓器も破裂している。

「自殺だけはダメなんだ…自殺…だけは、ダメ、なんだ…」

タカヒトの意識が薄れていく。タカヒトの中に、初めて『死』に対する恐怖が生まれ始めていた。

影が、タカヒトの頭にハンマーを振り下ろす…かなり無造作に。

「やめてくれええっ！！！！」

タカヒトの叫びは、鈍い衝撃と飛び散る血にかき消される。そして、タカヒトの意識は闇に飲まれた…

『斬殺』

どれくらいの時間が経ったのか…永劫のような、刹那のような時を経て、タカヒトは目覚めた。

周りは、またしても真っ赤な闇。上下も無く、自分が立っているのか寝ているのかも分からない。どちらかというところ、浮かんでいる、いや、浮かべられているといった感じだった。

「ボク…？生きてる…？」

生きてる、という問いは、正確には間違っている。タカヒトは既に死んでいる。生きてるとするのは、魂を破壊された筈なのに、もとに戻っている事を指している。

「よかつたあ…あのままボクがボクに殺されるなんて死にきれないよね？」

そう嘯なげきながら、身体からだのあちこちを確認する。あれだけの殴打にあった形跡はまるで無い。

「また何か起きるのかな？出来ればボク以外の人に殺される方がいいけど…」

そんな事を考えていると、背中に鋭い痛みが走った。次いで、痛みが走った箇所が熱くなる。タカヒトは、何が起きたのか分からなかった。

「何？これ、初めての感じだけど…」

タカヒトの背中うしろは、肩口から腰にかけてバツサリと斬られている。

『ばつて〜ん』

タカヒトの背後で、またしても、あの声が聞こえ、背中に再び痛みが走った。

「またなの？またボクがボクを殺すの…？」

タカヒトの声に、今までに無い響きが混じる。それは…“恐怖”。

自分の死や痛みではなく、それらを与えるモノに対する恐怖。影はタカヒトの声には答えず、無言でタカヒトの手首を切り落とす。

切り口からダラダラと溢れる鮮血。鼓動に合わせて響く鈍い痛み。だが、今のタカヒトは、そんな感触を楽しむどころでは無い。

「どうして…どうしてボクがボクを殺すの！？ボクは他の誰かに殺される事を望んでいるのに…！」

タカヒトの目に大粒の涙が浮かぶ。自分に殺される。タカヒトには、その事実が耐えられなかった。

何人も殺してきた自分。ならば、自分への罰は、今までに殺してきた『作品』達の手による『復讐』だと思っていた。なのに

影は次々とタカヒトを切り刻んでいく。肘、肩、太股、腹…ついに、腹の切り口から、内臓がはみ出して来はじめた。

「あ…あ…」

タカヒトは呆然として、己の腹から吹き出す体液と臓物を見つめている。

「ボクはもう嫌だ…」

小さな呟き。

「嫌なんだ…！」

はつきりとした声。

「いやだあああああっ…！」

大きな叫び。だが…

タカヒトの首が、影に切り落とされた

『刺殺』

「…やっぱり、リセットされるんだね…」

タカヒトは懺然とした顔で一人ごちた。またしても真つ赤な闇に浮かべられている。傷も全て消え失せて、痛みも無い。

「次はどう殺されるのかな…やっぱりボクに殺されるのかな？」

口調は軽いが、かなりシヨックは大きかった。他人事みたいに考えないと、とても耐えられない。

「あつ…!？」

何の前触れも無く、タカヒトの脚に激痛が走る。見ると、ナイフのような物が太股に刺さっている。

「これって…カッターの刃じゃない？」

カッターの刃…タカヒトには、身に覚えがあつた。

『黒ひげ風ゲーム』

あの声が出て、二本目が脇腹に刺さる。流れる血、脳内に響く鈍い痛み。

「やっぱりボクか…記憶違いじゃなければ…？」

そう、これは三人目の『作品』の時の『技法』だ。カッターの刃を使って、『黒ひげ危機一髪ゲーム』を模したデザインだった。薄く、深い傷口に半ばまで埋まる刃が、えもいわれぬ美を醸しだしていた。そう、あれは最高の作品といえる出来だった…

自分自身があの作品のようになるのは構わない。むしろ、是非ともなりたいと思う。『殺し手』^{てしゅ}が自分でなければ。

「もうたくさんだよ…」

涙声で呟くタカヒトの右目に、薄い刃が押し込まれる…間違いなくタカヒトの刺し方だ。少し上方向からやや下に刺す。抵抗もなく刺せる、理想的な刺し方。そして、ゆっくりと引き上げられる刃。やがて、血や粘液と共に流れ落ちるタカヒトの眼球…その感触にタカヒトは酔った。

『あゝあ、ゲームオーバーだね…』

またしてもあのタカヒトの声。

「最高の気分だったのに…台無しだよ…サイテー」

その言葉は、無数の刃に遮られた。数百、いや数千の刃がタカヒトを刺す。無数の肉片に刻まれながら、タカヒトは考えていた。

(もう…いやだ…ボクに殺されるのだけは…)

『焼身』

タカヒトは、今までとは違う空間にいる。

周りは、今までとは違ってかわって真つ白な空間だった。これまでの赤い空間と比べて、この白い空間は異様な雰囲気醸しだしていた。

「何だか急に雰囲気変わったよね？今度は何が始まるのかな？」

そう呟くタカヒトの顔は笑っているようでもあり、泣いているようでもあった。自分自身に殺され続ける恐怖。この世界中で最も無様な最期、『自殺』を味わうのは苦痛以外の何物でもなかった。

今のタカヒトを支えていたのは、まだ自分が『殺されている』という事実であった。大丈夫、自分はまだ完全な『自殺』をしたわけじゃない。それだけがタカヒトの自我を繋いでいた。

『キャンプファイア』いっちゃんおう

また、あの声が出た。だが今回はあの影が現れない。それに、今の声はタカヒトの中から聞こえていた。

そして、声と共にタカヒトの前にポリ容器が現れる。容器の蓋が外され、ゆっくりとポリ容器が持ち上げられる…他でもない、タカヒト自身の手によって…

「ちよつと、ボク、何してるの!？」

狼狽したタカヒトの声などお構い無しに、容器が傾けられて、中身がタカヒトを濡らしていく…軽い独特の刺激臭、容器の中身はガソリンだった。

「ダメだ、止める…畜生、止まれ!ボクの手なんだから言う事を聞けっ!！」

タカヒトの叫びも虚しく、タカヒトの身体はガソリンを浴び続ける。タカヒトの身体は今やガソリンまみれに濡れ、顔は涙でぐしゃぐしゃになっている。自分自身で行おうとしている行動は、まさに『焼

身自殺』以外の何物でもない。タカヒトには、次に自分がとるであろう行動が分かっている。それだけは絶対に許されない。だが、タカヒトの身体は、もはや言うことをきかない。

不意にタカヒトの右手が空を掴んだ。ゆっくりと手が引き戻される。そして開かれた手のひらには、マッチの箱が載っていた。

「いやだあああつー！」

タカヒトの声は悲鳴に変わり、金切り声へと転じていく…

「こんなモノ、こんなモノなんか…！！」

タカヒトは、唯一動く頭を向け、マッチを吹き飛ばそうと息を吹いた。手のひらの箱は揺らぎ、落ちそうになるものの、絶妙なバランスで手の上に残った。

『あー、動いちゃダメだつてばあ』

あの声が出て、タカヒトの頭が硬直した。それと共に手が動く。マッチを取出して、箱の脇を擦る。炎が生まれ、タカヒトの胸に近づいていく。

「いやだツ…！！やめて…やめろつて言つて…！！」

タカヒトの声は、巻き起こる炎の渦に飲み込まれていった。カガミタカヒトの初めての『自殺』だった…

『首吊り』

白い空間。上も下も無く、前も後ろも、自分が立っているのか寝ているのかも分からない。だけど、この空間に自分はある。

「あ…ああ…」

タカヒトは壊れかけていた…遂に訪れた『自殺』。最後の門が、外れた。

「いやだ…もう…死にたくないよ…」

タカヒトは泣いている。もう耐えられない。だが、そんなタカヒトの声をかき消すように、やたらと陽気な声が響き渡った。そう、あの声…

『バンジージャンプ、行ってみよう!』

唐突に、タカヒトの足下に『地面』が出来た。見えないけれど、確かにそこに存在する『床』…そう、それは、忘れもしないあの…

「死刑台、だよ…?」

いつの間にか現れた階段、てっぺんにある絞首台…

『それじゃあ、スタートしちゃおうか』

声と同時に、タカヒトの足が動きだす。階段をゆつくりと上がる。勿論、タカヒトの意思ではない。

止まる事無く、タカヒトは階段を昇り続けた。遂に最上部につき、目の前にぶら下がっているロープの環を手にする。

「やめて…」

タカヒトは声をあげる事しか出来ない。

「やめろって…!」

タカヒトの手は、ロープを持ち、環を自らの首に掛けていく

『準備オツケー』

あの声がして、タカヒトの目の前に、スイッチの付いた台が運ばれて来た。

『カウントダウン!』

10…

「いやだ」

9…

「やめろ」

8…

「こんなの…」

そして…

2…

「いやだああああっ！」

1…

「助けてええっ！！！！！」

タカヒトの手が動く。そして、スイッチを自らの手が叩いた。

ガコンツ！足下が無くなり吊されるタカヒトの身体。暫くの間じたばたと藻掻くタカヒトの身体。そして、ついには動かなくなる

『そして、ボクは』

あの時と同じように、絞首の苦しみがタカヒトを襲う。酸素を失い、視界は歪み始める。目隠しが無いせいで、余計に視界の歪みが苦しみへと転嫁されていく。やがて、視界に赤みが交じってきた。そう、あの感覚…『死』がもうすぐそこに迫ってきている。

「もういやだ…助けて…」
そんな叫びも、喉から溢れてきた血の泡にかき消されていく

「ッ!?!」

タカヒトは跳ね起きた。独房の中、タカヒトはまだ、生きていた

「夢…?」

ホツとするタカヒト。その時、独房の扉が開いた。

「42731番、時間です。出なさい」

タカヒトの顔が恐怖に凍り付く。看守の声は、タカヒトの声だった。

『今度は、始めから全部自分自身でやってもらうよ…死刑台から全

部』

どこからか聞こえた言葉に、タカヒトは半狂乱になる。

「いやだあああつ!」

中から連れ出そうとする看守の手を払いのけ、泣きながら外に出るのを拒むタカヒト。やがて、もう一人の看守が応援に駆けつけてきた。その看守の顔も、タカヒトだった。

「うわああつ!?!」

実は看守達は、タカヒトとは似ても似つかない顔をしていた。タカヒトの壊れた意識は、誰の顔も自分自身に見えている。

そして、遂に取り押さえられ、二人の看守に両腕を捉まれて、タカヒトは連れていかれる…

「いやだあああつ!?!」

「やめろおおおつ!?!」

「助けてええええっ！！！」

廊下に、タカヒトの叫び声が響き渡る。徐々に遠ざかる叫び声。やがて、廊下には静寂が戻り、風によってタカヒトの声が微かに聞こえた

「誰か、誰か僕を殺してくれええっ……！」

『そして、ボクは』 (後書き)

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。いつもと違う文体に挑戦してみました。果たして… (苦笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6983c/>

そして、ボクは殺される

2010年10月9日22時33分発行